

18世紀におけるオランダ東インド会社の 錫貿易に関する数量的考察

島 田 竜 登

1. 問題の所在

オランダ東インド会社は1602年に設立され、18世紀末に解散するまでおよそ2世紀間にわたって存続した貿易会社であり、当時のアジアにおいては、もっとも強力なネットワークを有する一大貿易組織であった。オランダ東インド会社の最盛期とされる17世紀には、ヨーロッパから持ち込んだ銀は、日本から入手した銀とあわせて、オランダ東インド会社にとって有力な取引手段であった。しかしながら、1668年以降、幕府が下した禁令により、日本から銀が入手できなくなり、かわって、卑金属である銅が貿易商品として重要な地位を占めるように至った。オランダ東インド会社は、その会社の盛衰を、銀を中心とした時代から銅を中心とした時代へという時代の変遷と共同の歩調をとったのである。

本稿が扱う錫も銅と同じく、18世紀のオランダ東インド会社を象徴する商品のひとつであった。銀と比べ、銅と同様、価値が低く、会社の衰退期を示すのにふさわしい商品のひとつであるといえるかもしれない。しかしながら、本稿があえて錫に着目する理由として、次の三点をさらに挙げることができるだろう。

第一には、錫はアジア内で入手され、基本的にはアジア内で消費された商品であったことである。すなわち、18世紀におけるオランダ東インド会社のアジア間貿易での、重要商品のひとつであった¹。それゆえ、錫の貿易史研究が、オランダ東インド会社のアジア間貿易の研究の深化に貢献する可能性が高いと

いえるのである。

第二に、オランダ東インド会社の錫のアジア間貿易の発展は、18世紀におけるアジア間貿易全体の変化を示すよい実例となっている点である。前近代における長距離貿易は、基本的には奢侈品取引に象徴されがちであるが、実際には、18世紀頃より、旧来と比べて嵩高のわりには安価である商品の取引が中心となるように変化していったと考えられている²。具体的には、たとえば、銀や金を媒介とした胡椒や香辛料、生糸などの取引から、銅や錫、蘇木、米、砂糖などといった商品の取引に主力が移ったのである。これは、一部の富有な階級の消費に供することを大きな目的としていた前近代的なアジアの国際商業が、18世紀には、一般大衆の日常生活にかかわる商品をアジア域内の貿易が中継し、アジア経済全体としては、国際分業のメカニズムが次第に機能するように変化したと想定できることを意味している。

第三には、同じく銅と同様ではあるが、アジアの産錫業は19世紀から20世紀にかけての近代期に重要な一大産業となることである。たとえば、日本銅は、18世紀のアジア間貿易において重要商品であったが、19世紀以後も日本において産銅業は極めて重要な産業であった。一方、錫は、東南アジア、とくに現在の南部タイ、マレーシア、インドネシア（バンカ島）が18世紀における主要生産地であったが、これらの地域での錫生産は19世紀以降も継続して開発され、世界的な産出高のうち大きなシェアを占めていたことは言をまたない。言い換えれば、19世紀以後のアジアにおける産業発展の萌芽を18世紀の錫貿易史の研究から読み取ることも可能となりうるのである。

本稿では、以上のような問題意識に立ち、18世紀におけるオランダ東インド会社の錫貿易について数量的な分析を試みることにする。まず、バタヴィアに

1 18世紀前半におけるオランダ東インド会社のアジア間貿易についての概観を論じたものとしては、島田竜登「18世紀前半におけるオランダ東インド会社のアジア間貿易」、『西南学院大学経済学論集』第43巻第1・2合併号、2008年がある。また、オランダ東インド会社による日本銅のアジア間貿易を検討したものとして、Ryuto Shimada, *The Intra-Asian Trade in Japanese Copper by the Dutch East India Company during the Eighteenth Century* (Leiden and Boston: Brill Academic Publishers, 2006) を挙げることができよう。

2 島田竜登「オランダ東インド会社のアジア間貿易－アジアをつないだその活動－」、『歴史評論』644号、2003年、7-12頁。

における錫の移入ならびに移出について概観し、ついで、バタヴィアでの錫の集荷について詳細を明らかにする。その後は、錫の販売市場を分析することを試み、とくに中国市場の錫吸引力が強大になったことを検証することになるであろう。

なお、本稿は、各種の先行研究や刊行史料のほか、オランダ東インド会社の作成した未公開文書を利用している。利用した未公開文書は、すべてオランダのデン・ハーグ市にあるオランダ国立公文書館（Archief Nationaal：NA）の所蔵するものである。具体的には、オランダ東インド会社文書（Archief van de Verenigde Oostindische Compagnie, 1602-1795：VOC）のほか、バタヴィア経理局長文書（Archief van de Boekhouder-Generaal te Batavia, 1700-1801：BGB）、日本商館文書（Archief van de Nederlandse Factorij in Japan, 1609-1860：NFJ）、さらには私家文書のひとつであるネーデルブルフ家文書（Collectie Nederburgh）を利用することにする³。

2. 錫貿易の概要

表1は、オランダ東インド会社のアジアにおける中心拠点であったバタヴィアにおける会社の移入出統計であり、Els M. Jacobs が整理し、公表したデータを若干、加工したものである⁴。実際のところ、この Jacobs のデータは、18世紀中の9年間分のデータのみを扱ったものであり、極めて心もとないデータではある。もっとも、本データは、18世紀のうち5つの時期にわたるもので、18世紀のバタヴィアにおけるオランダ東インド会社の一般的な貿易活動の推移を何う程度の利用を妨げるほどではないかもしれない。なお、オランダ東インド会社はアジア域内にわたる地域間貿易に多数従事していたが⁵、18世紀のバタヴィアは「扇の要」ともいえる存在であった⁵。長距離をまたにかけるアジア域内貿易の中継拠点であり、たいいていの場合、アジア間貿易での取扱商品はバ

3 各文書コレクションの概要については、J.A.M.Y. Bos-Rops *et al.* (eds.) *De Archieven in het Algemeen Rijksarchief* (Alphen aan den Rijn：Samsom Uitgeverij, 1982) を参看。

4 Els M. Jacobs, *Merchant in Asia: The Trade of the Dutch East India Company during the Eighteenth Century* (Leiden：CNWS Publications, 2006) pp. 350, 368-369.

表1 バタヴィアにおける錫の移入と移出, 1711-1773年
(年平均値; 価額は送状価格によるに基づく)

(1) 1711/12-1712/13年度

移入:	数量 (オランダ・ポンド)	価額 (fl.)	% (数量ベース)
Siam	170,400	42,600	75.1
Malacca	52,500	12,600	23.1
Palembang	0	0	0.0
Ceylon	4,000	1,000	1.8
Banjermasin	0	0	0.0
合計	226,900	56,200	100.0

移出:	数量 (オランダ・ポンド)	価額 (fl.)	% (数量ベース)
Persia	32,800	8,200	10.6
Mocha	17,600	4,400	5.7
Surat	21,600	5,400	7.0
Malabar	11,200	2,800	3.6
Ceylon	18,000	4,500	5.8
Coromandel	30,400	7,600	9.8
Bengal	30,400	7,600	9.8
Japan	0	0	0.0
Canton	0	0	0.0
Cheribon	0	0	0.0
The Netherlands	148,400	37,100	47.8
合計	310,400	77,600	100.0

(2) 1730/31-1731/32年度

移入:	数量 (オランダ・ポンド)	価額 (fl.)	% (数量ベース)
Siam	270,000	67,500	47.5
Malacca	129,200	32,300	22.7
Palembang	169,091	37,200	29.8
Ceylon	0	0	0.0
Banjermasin	0	0	0.0
合計	568,291	137,000	100.0

移出:	数量 (オランダ・ポンド)	価額 (fl.)	% (数量ベース)
Persia	0	0	0.0
Mocha	21,304	4,900	7.8
Surat	0	0	0.0
Malabar	51,818	11,400	18.9
Ceylon	36,800	9,200	13.4
Coromandel	0	0	0.0
Bengal	0	0	0.0
Japan	6,800	1,700	2.5
Canton	0	0	0.0
Cheribon	8,182	1,800	3.0
The Netherlands	149,600	37,400	54.5
合計	274,504	66,400	100.0

(3) 1751/52-1752/53年度

移入:	数量 (オランダ・ポンド)	価額 (fl.)	% (数量ベース)
Siam	80,938	25,900	5.1
Malacca	441,852	119,300	28.0
Palembang	1,057,727	232,700	66.9
Ceylon	0	0	0.0
Banjermasin	0	0	0.0
合計	1,580,517	377,900	100.0

移出:	数量 (オランダ・ポンド)	価額 (fl.)	% (数量ベース)
Persia	94,444	25,500	4.2
Mocha	28,519	7,700	1.3
Surat	202,222	54,600	8.9
Malabar	62,963	17,000	2.8
Ceylon	15,185	4,100	0.7
Coromandel	50,370	13,600	2.2
Bengal	41,481	11,200	1.8
Japan	60,370	16,300	2.7
Canton	1,658,889	447,900	73.3
Cheribon	9,630	2,600	0.4
The Netherlands	39,259	10,600	1.7
合計	2,263,333	611,100	100.0

表1 つ づ き

(年平均値；価額は送状価格によるに基づく)

(4) 1771/72-1772/73年度

移入：

	数量 (オランダ・ポンド)	価額 (fl.)	% (数量ベース)
Siam	0	0	0.0
Malacca	385,769	100,300	72.0
Palembang	110,000	24,200	20.5
Ceylon	0	0	0.0
Banjermasin	40,000	8,800	7.5
合計	535,769	133,300	100.0

移出：

	数量 (オランダ・ポンド)	価額 (fl.)	% (数量ベース)
Persia	0	0	0.0
Mocha	0	0	0.0
Surat	0	0	0.0
Malabar	0	0	0.0
Ceylon	0	0	0.0
Coromandel	10,000	2,400	0.4
Bengal	0	0	0.0
Japan	106,667	25,600	4.0
Canton	2,303,333	552,800	85.5
Cheribon	3,750	900	0.1
The Netherlands	270,833	65,000	10.1
合計	2,694,583	646,700	100.0

(5) 1789/90年度

移入：

	数量 (オランダ・ポンド)	価額 (fl.)	% (数量ベース)
Siam	0	0	0.0
Malacca	18,621	5,400	5.3
Palembang	333,182	73,300	94.7
Ceylon	0	0	0.0
Banjermasin	0	0	0.0
合計	351,803	78,700	100.0

移出：

	数量 (オランダ・ポンド)	価額 (fl.)	% (数量ベース)
Persia	0	0	0.0
Mocha	0	0	0.0
Surat	25,417	6,100	0.8
Malabar	68,333	16,400	2.2
Ceylon	5,000	1,200	0.2
Coromandel	0	0	0.0
Bengal	0	0	0.0
Japan	51,250	12,300	1.7
Canton	2,832,917	679,900	91.4
Cheribon	0	0	0.0
The Netherlands	115,833	27,800	3.7
合計	3,098,750	743,700	100.0

註：価額について、アジアの軽・重フルデンについては本国フルデンに換算してある。

出典：Els M. Jacobs, *Merchant in Asia: The Trade of the Dutch East India Company during the Eighteenth Century* (Leiden: CNWS Publications, 2006) pp. 350, 368-369.

タヴィアを經由していたため、表1のような、バタヴィアでの会社貿易の移出入データを検討することで、会社のアジア内での貿易活動の一般的傾向を知ることができるのである。

さて、表1に示されるデータの分析ではあるが、まず移入について検討しよう。バタヴィアに錫を供給したのは、シヤム、マラッカ、ならびにバレンバンの商館であった。そのほかに、セイロン商館やバンジェルマシン商館が挙げられているが、これはバラストとして当該商館に送られた錫が、バタヴィアに回送されてきたためであって、セイロンやバンジェルマシンが錫の生産供給地であったわけではない。入荷量についていえば、18世紀の当初は、23万オランダ・ポンド（1オランダ・ポンド＝約0.494キログラム）程度であったが、その後は拡大し、18世紀半ばには年間約158万オランダ・ポンドが会社船によってバタヴィアにもたらされた。表1によれば、その後18世紀後半には錫の移入量が低下しており、18世紀末には35万オランダ・ポンドとなっている。

ただし、注意しなければならないことは、この移入量は、会社船によってバタヴィアに入荷した会社勘定の錫の移入量を示しているに過ぎないことである。実際には、後述するように、非会社船によって錫が入荷し、バタヴィアで会社に対して売却された錫があった。これを示す事例として、表1における各期間の移入量と移出量を比べてみればよい。たとえば、1711/12-1712/13年度には、約23万オランダ・ポンドの移入があったのにたいして、約31万オランダ・ポンドの移出がある⁵。この時期は10万オランダ・ポンドの移出超過にも満たないが、こうした移出超過は後年になるほど増加する。18世紀半ばには68万オランダ・ポンド、1789/90年度には275万オランダ・ポンドの移出超過となる。この移出超過は、バタヴィアの在庫調整の結果というのではなく、あきらかにバタヴィアでオランダ東インド会社が錫を購入したことの証左である。実際、後述

5 Femme S. Gaastra, *De geschiedenis van de VOC* (Zutphen: Walburg Pers, 2002) p. 124; Shimada, *The Intra-Asian Trade in Japanese Copper*, p. 19.

6 オランダ東インド会社は、アジア内において、基本的に会計年度は、9月1日に開始し、翌年8月31日閉じられた。顕著な例外は日本商館であり、毎年、オランダ船が長崎を出港する直前の商館長の交代をもって会計年度が改められた (Shimada, *The Intra-Asian Trade in Japanese Copper*, p. 33)。

するように、バンカ島で生産された錫がパレンバン経由で現地船によりバタヴィアにもたらされていたのであった。

ところで、錫の供給地としては、シャムやマラッカ、パレンバンがあったが、後に詳述することになるパレンバンからのバンカ錫を除いて、各生産地について概略を記しておく。まず、シャムの錫生産であるが、基本的にはシャムの中心であるアユッタヤー近郊で生産されるのではなく、むしろ、シャム南部のマレー半島で生産されていた。錫の集荷地として著名なのは、リゴールすなわちなコーン・シー・タマラートであり、オランダ東インド会社はシャムの首都であるアユッタヤーのほかに、リゴールにも商館を設置し、錫の購入を図っていた⁷。そのほか、シャムの属国であるパッターニーも錫の集荷地として重要であった⁸。また、インド洋側となるが、ジャンク・セイロンすなわちブーケットやトランなどでも錫が生産されていた⁹。シャムからオランダ東インド会社に供給される錫は原則的に、いったんバタヴィアに運ばれ、そこからアジア各地やオランダ本国といった錫消費地へと転送された。表1に示されているように、18世紀の当初では、オランダ東インド会社が入手するアジア産の錫は、シャム錫がその中心であった。現に、1711/12年度から1712/13年度にかけては、年平均17万オランダ・ポンドのシャム錫がバタヴィアに入荷している。この期間にマラッカ錫は5万オランダ・ポンド程度しかバタヴィアに入荷しておらず、シャム錫の重要性は顕著であったといえよう。1730年頃の数値を見ると、シャム錫の絶対量は増加したが、全体に占めるシェアは低下し、18世紀半ばにはアジア錫全体のうち、シャム錫のシェアは10パーセントを下回る程度になった。さらに、1767年にアユッタヤー朝がビルマ軍の攻撃のもとに瓦解し、オランダ東インド会社がリゴールも含めたシャムでの貿易活動を停止すると、シャム錫

7 Supaporn Ariyasajsiskul, “The So-called Tin Monopoly in Ligor: The Limits of VOC Power vis à vis a Southern Thai Trading Polity”, *Itinerario: International Journal of the History of European Expansion and Global Interaction*, 28(3), 2004.

8 George Vinal Smith, *The Dutch in Seventeenth-Century Thailand* (DeKalb: Center for Southeast Asian Studies, Northern Illinois University, 1977) pp. 8, 44-45.

9 G. William Skinner, *Chinese Society in Thailand: An Analytical History* (Ithaca: Cornell University Press, 1957) p. 2; John Anderson, *Political and Commercial Considerations relative to the Malayan Peninsula and the British Settlements in the Straits of Malacca* (Prince of Wales Island: William Cox, 1824) pp. 140-141.

のバタヴィアへの入荷は皆無となった。

一方、マラッカで集荷された錫は、もともとマラッカ海峡やインド洋に面するマレー半島の各地で生産された錫の一部がマラッカのオランダ東インド会社の手に帰したものであり、シヤム錫の場合と同様、17世紀以来、オランダ東インド会社はこの地域で産出される錫貿易に従事していた¹⁰。こうしたマラッカ錫の生産地としては、セランゴール、ペラ、ケダなどがあったが¹¹、なかんずくオランダ東インド会社と良好な関係を保ち、会社に多量の錫を供与したのはペラである。とくに、1770年代には、オランダ東インド会社の勧めもあって、ペラは中国人労働者をペラの錫鉱山で受け入れ、生産量の増大を図った¹²。18世紀におけるマラッカ錫のバタヴィアへの廻送状況は、表1のとおりであり、18世紀前半期には絶対量を年平均で5万オランダ・ポンドから44万オランダ・ポンドへと増加させている。しかし、18世紀後半にはその数値は次第に低下した。これは、後述するように、マラッカ錫がバタヴィアに廻送されることなく、マラッカで現地アジア人商人に錫が売却されていたことも要因となっている。また、オランダ東インド会社の入手したアジア産錫のうちでのシェアについては、後述するように、18世紀にはバンカ錫の割合が増大し、後述するように表1に示めされる以上のバンカ錫がバタヴィアに流入したため、マラッカ錫の重要性は高くはなかったものと考えられる。表2と図1は、オランダ東インド会社を取り扱ったバンカ錫とマラッカ錫を示したものである。バンカ錫の取扱高は、1740年代に、100万オランダ・ポンドをはるかにしのぐようになるが、マラッカ錫の取扱高は、バンカ銅に比べて極めて低く、1740年以降、100万オラ

10 Graham W. Irwin, “The Dutch and the Tin Trade of Malaya in the Seventeenth Century”, in: Jerome Ch'en and Nicholas Tarling (eds.), *Studies in the Social History of China and South-East Asia: Essays in Memory of Victor Purcell* (Cambridge: Cambridge University Press, 1970).

11 たとえば、1678年にオランダ東インド会社は、ペラとケダと協定を結び、生産された錫の半分をオランダ東インド会社に売却することになっていた (Dianne Lewis, “The Tin Trade in the Malay Peninsula during the Eighteenth Century”, *New Zealand Journal of History*, 3(1), 1969, pp. 56-57)。

12 Lewis, “The Tin Trade in the Malay Peninsula”, p. 55; Barbara Watson Andaya, *Perak: The Abode of Grave: A Study of an Eighteenth Century Malay State* (Selangor: Oxford University Press, 1979) pp. 337-338.

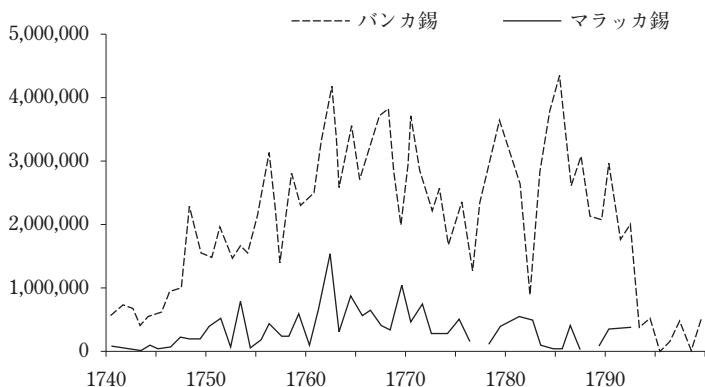
表2 オランダ東インド会社の錫購入量, 1740-1799年

年次	バンカ錫		マラッカ錫		年次	バンカ錫		マラッカ錫	
	単位： ピクル	オランダ・ ポンド換算	単位： ピクル	オランダ・ ポンド換算		単位： ピクル	オランダ・ ポンド換算	単位： ピクル	オランダ・ ポンド換算
1740	4,704	595,142	513	64,904	1770	29,381	3,717,232	3,547	448,760
1741	5,188	656,377	452	57,186	1771	21,891	2,769,610	6,080	769,231
1742	6,261	792,131	254	32,136	1772	17,554	2,220,901	2,335	295,420
1743	3,000	379,555		0	1773	20,539	2,598,558	2,160	273,279
1744	4,544	574,899	445	56,301	1774	12,900	1,632,085	2,285	289,094
1745	4,905	620,572		0	1775	19,367	2,450,278	3,965	501,645
1746	7,883	997,343	517	65,410	1776	10,171	1,286,817	1,495	189,145
1747	7,805	987,475	1,584	200,405	1777	18,977	2,400,936		
1748	18,483	2,338,436	1,483	187,627	1778	25,259	3,195,724	970	122,723
1749	12,346	1,561,994	1,602	202,682	1779	29,199	3,694,205	3,156	399,291
1750	11,877	1,502,657	3,244	410,425	1780	25,386	3,211,791	3,823	483,679
1751	16,086	2,035,172	4,165	526,948	1781	21,682	2,743,168	4,414	558,451
1752	11,202	1,417,257		0	1782	6,914	874,747	4,312	545,547
1753	13,495	1,707,363	6,601	835,147	1783	23,506	2,973,937	940	118,927
1754	12,152	1,537,449		0	1784	29,826	3,773,532	181	22,900
1755	19,082	2,414,221	1,200	151,822	1785	35,037	4,432,819	11	1,392
1756	24,943	3,155,744	3,409	431,301	1786	20,284	2,566,296	3,329	421,179
1757	11,112	1,405,870	1,845	233,426	1787	24,989	3,161,564	240	30,364
1758	22,865	2,892,839	1,845	233,426	1788	16,714	2,114,626		
1759	18,825	2,381,705	5,053	639,297	1789	16,600	2,100,202	924	116,903
1760	19,183	2,426,999	477	60,349	1790	24,200	3,061,741	2,670	337,804
1761	24,989	3,161,564	5,549	702,050	1791	13,850	1,752,277	2,947	372,849
1762	33,395	4,225,076	12,742	1,612,095	1792	16,134	2,041,245	2,937	371,584
1763	20,307	2,569,205	2,352	297,571	1793	2,846	360,071		
1764	28,298	3,580,213	7,191	909,793	1794	4,500	569,332		
1765	21,464	2,715,587	4,410	557,945	1795		0		
1766	24,976	3,159,919	5,167	653,720	1796	1,400	177,126		
1767	29,648	3,751,012	3,110	393,472	1797	4,227	534,793		
1768	30,157	3,815,410	2,879	364,246	1798		0		
1769	15,591	1,972,546	8,405	1,063,386	1799	4,214	533,148		

註：1ピクルは62.5キログラムで換算。

出典：Reinout Vos, *Gentle Janus, Merchant Prince: The VOC and the Tightrope of Diplomacy in the Malay World, 1740-1800* (Leiden: KITLV Press, 1993) pp. 217-218.

図1 オランダ東インド会社の錫購入量, 1740-1799年
単位：オランダ・ポンド



出典：表2 参看。

ンダ・ポンドを超えた年は、1762年と1769年の2カ年があるに過ぎないのである。

一方、バタヴィアに入荷した錫の販路については次のような特徴がある。第一には、オランダ本国への転送分である。18世紀前半には年平均で約15万オランダ・ポンドの錫が本国へ送られており、こうした本国移出分は全体の約半分を占めていた。しかし、18世紀の後半には、その割合は1割程度以下にまで減少する。第二の特徴は、インド・ペルシア方面の錫市場である。実際、18世紀前半までは、バタヴィアに集荷された錫の半分は本国に送られ、残りの半分はインド・ペルシア方面に運ばれた。代表的な販売地としては、ペルシア商館、モカ商館のほか、スーラト、コロマンデル、ベンガルといった商館を挙げることができる。そもそも、錫の用途としては、ピューターないしはブロンズなどの合金の原料として使われ、食器などの家庭用品や大砲などの鑄造などがあり、ヨーロッパや南・西アジアでの需要が強かったのである¹³。

かくして、東南アジア産の錫は、オランダ東インド会社を通じてヨーロッパ

13 Jacobs, *Merchant in Asia*, p. 199.

や南・西アジアに輸送されていたのだが、18世紀中にはこうした錫の流れに大きな変化があらわれた。この変化は、中国市場における錫需要の増大であり、オランダ東インド会社の錫貿易の販路に関する第三の特徴といえる。表1にみる通り、中国の広東貿易にむけての錫の移出は、18世紀半ばに突如として表れ、次第に7割から9割のシェアを確保するにいたるのである。なお、錫の主たる消費市場が西から東へ変化したことについては、後に詳細を検討することとする。

3. バタヴィアへの集荷

バタヴィアで集荷される錫については、大まかに分類すると二つに分けることができる。第一は、会社船によりバタヴィアに運び込まれた錫であり、これはオランダ東インド会社の勘定によるものである。第二は、会社船以外の船舶によって運ばれ、バタヴィアでオランダ東インド会社に売却された錫である。こうした非会社船によって運ばれる錫は、バンカ島で生産された錫であった。そもそも、バンカ島では1710年代から本格的な錫の採掘が開始され、その後、中国人の錫採掘労働者の増加もあり、18世紀を通じて次第に生産量を増大させていった¹⁴。バンカ島は、パレンバン王国下にあり、バンカ島で生産された錫はいったんスマトラ島のパレンバンに運ばれた¹⁵。パレンバンに運送された錫の一部はパレンバンでオランダ東インド会社に売却され、会社船によってバタヴィアに運ばれたが、一部の錫はパレンバンのスルタン配下の現地商人の手により、バタヴィアに送られ、オランダ東インド会社に売却されたのであった。

このようにバタヴィアでオランダ東インド会社が入手したバンカ錫の年間取扱高は、表3ならびに図2で看取することができる。バタヴィアに非会社船によって持ち込まれ、オランダ東インド会社に売却された錫は「バタヴィア購入量」として示され、他方、オランダ東インド会社がパレンバンで直接、購入し、

14 J.A. Schuurman, "Historische schets van de tinwinning op Banka", Hoofdstuk I, *Jaarboek van het Mijnwezen in Nederlandsch Oost-Indië*, 1898, Vervolg; Mary F. Somers Heidhues, *Bangka Tin and Mentok Pepper: Chinese Settlement on an Indonesian Island* (Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 1992) pp. 6-19.

15 Jacobs, *Merchant in Asia*, pp. 214-216

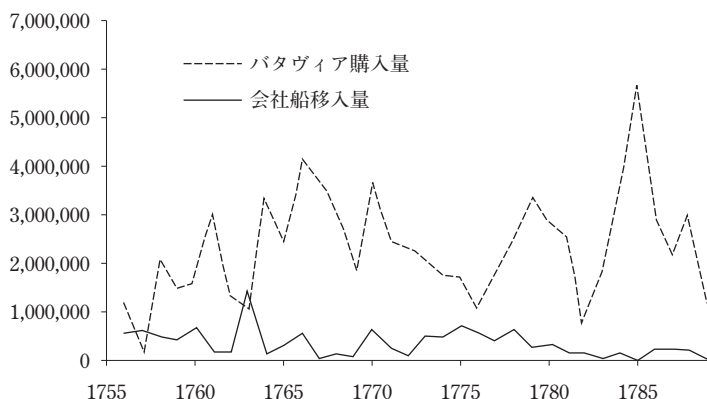
表3 バンカ錫のバタヴィア集荷量, 1756-1789年

単位：オランダ・ポンド

年次	バタヴィア購入量		会社船移入量		合計
		%		%	
1756	1,209,456	66.6	606,693	33.4	1,816,149
1757	100,916	14.1	612,721	85.9	713,637
1758	2,167,295	82.2	470,000	17.8	2,637,295
1759	1,459,644	76.9	439,125	23.1	1,898,769
1760	1,565,308	69.0	702,875	31.0	2,268,183
1761	3,023,663	95.1	154,316	4.9	3,177,979
1762	1,269,054	89.0	157,000	11.0	1,426,054
1763	1,100,933	43.4	1,437,500	56.6	2,538,433
1764	3,412,340	96.5	125,000	3.5	3,537,340
1765	2,428,387	90.4	257,500	9.6	2,685,887
1766	4,193,550	88.2	561,500	11.8	4,755,050
1767	3,706,107	100.0	0	0.0	3,706,107
1768	3,173,701	96.2	125,563	3.8	3,299,264
1769	1,837,066	94.3	111,875	5.7	1,948,941
1770	3,749,874	85.2	653,375	14.8	4,403,249
1771	2,464,301	90.1	272,125	9.9	2,736,426
1772	2,362,277	96.7	81,250	3.3	2,443,527
1773	2,047,992	79.3	534,938	20.7	2,582,930
1774	1,692,680	77.8	483,875	22.2	2,176,555
1775	1,717,054	70.9	704,000	29.1	2,421,054
1776	1,137,050	65.8	591,875	34.2	1,728,925
1777	1,932,637	82.9	400,000	17.1	2,332,637
1778	2,493,182	79.0	664,250	21.0	3,157,432
1779	3,388,053	92.8	261,875	7.2	3,649,928
1780	2,823,358	89.0	350,000	11.0	3,173,358
1781	2,549,751	94.1	160,500	5.9	2,710,251
1782	733,119	84.8	131,250	15.2	864,369
1783	1,937,922	100.0	0	0.0	1,937,922
1784	3,629,489	96.7	125,000	3.3	3,754,489
1785	5,736,873	100.0	0	0.0	5,736,873
1786	2,810,636	91.8	250,000	8.2	3,060,636
1787	2,147,418	89.6	250,000	10.4	2,397,418
1788	3,020,333	94.2	187,500	5.8	3,207,833
1789	1,082,765	100.0	0	0.0	1,082,765

Source : NA VOC 3821 : 793.

図2 バンカ錫のバタヴィア集荷量, 1756-1789年
単位：オランダ・ポンド



出典：表3 参看。

バタヴィアに運んだバンカ錫は「会社船移入量」として表示されている。購入方法の違いによるバンカ錫の取扱高を比較すると、圧倒的に前者の購入方法で入手されたバンカ錫の方が多かったことは一目瞭然である。たとえば、1756年から1789年にかけてのすべての年を集計すると、前者の錫が80,104,183オランダ・ポンドで、全体の約87パーセントを占めるのに対し、後者の錫は11,863,480オランダ・ポンドとなり、全体のわずか13パーセントを占めるにすぎない。各年のデータを検討しても、1757年だけが唯一、「会社船移入量」が全体の86パーセント程を占め、「バタヴィア」購入量を超過するにすぎないのである。

表4は、毎年、パレンバンからバタヴィアに運ばれるバンカ錫の季節的変動を示すデータである。たとえば、1758/59年度には、1758年10月3日、同年10月26日、さらに1759年8月13日に、バタヴィア商館の帳簿上、会社船によってパレンバンからバンカ錫がバタヴィアに運ばれている。一方、1859年の2月から8月にかけての毎月、月末付でオランダ東インド会社はバタヴィアで非会社船によって運ばれたバンカ錫を購入している。1771/72年度にもほぼ同様の季節的変動があり、夏から冬にかけて会社船によりバンカ錫がバタヴィアにもたらされ、冬から夏にかけて非会社船によってバンカ錫がバタヴィアに到来する

表4 バタヴィアへの錫集荷量, 1758/59年度および1771/72年度

(1) 1758/59年度				(2) 1771/72年度			
単位：オランダ・ポンド				単位：オランダ・ポンド			
日付	バタヴィア購入量	会社船移入量		日付	バタヴィア購入量	会社船移入量	
1758年10月3日		106,250		1771年12月9日		62,500	
1758年10月26日		129,500		1772年1月31日		18,750	
1859年2月28日	3,125			1772年3月2日	4,331		
1859年3月31日	510,264			1772年4月30日	1,884,358		
1859年4月30日	93,332			1772年5月31日	381,785		
1859年5月31日	245,414			1772年6月30日	95,354		
1859年6月30日	416,856			1772年8月27日		62,500	
1859年7月31日	128,218			1772年8月31日	17		
1859年8月13日		75,000		合計	2,365,844	143,750	
1859年8月31日	254,335						
合計	1,651,544	310,750					

出典：NA BGB 10676, 10837.

という季節的な周期変動が存在していたと推測される。

もちろんアジア人商人によってバタヴィアに運ばれたバンカ錫が、オランダ東インド会社がバレンバンで直に錫を入手した価格よりも高価であったことは当然である。表5は、1758/59年度に、オランダ東インド会社が最終的にバタヴィアに集荷した錫の取扱量を、バンカ錫、シャム錫、マラッカ錫と産地別に集計したものである。また、産地ごとの錫の価額、とくにバンカ錫に関しては入手機会ごとの価額が史料に記載されており、それぞれ100オランダ・ポンドあたりの価格を算出することができる。ただし、こうした価額や価格は、送状に記された金額、すなわちオランダ東インド会社が入手した際の購入金額に基づいていることには注意を要する。とまれ、錫の価格について検討すると、オランダ東インド会社がバレンバンで購入した際の錫価格は、100オランダ・ポンドあたり、24.2フルデン (fl.) から25.7フルデン程度であったのに対し、バレンバンからバタヴィアに運送した現地商人からのバタヴィアでの購入価格は、28.8フルデンないしは29.7フルデンであり、若干、高額であった。もちろん、バタヴィアで購入したバンカ錫にはバタヴィアまでの輸送費も含まれていることには留意しなければならない。ちなみに、シャム錫やマラッカ錫の価格は、100オランダ・ポンドあたり、それぞれ38.1フルデンと33.5フルデンであった。こうしたシャム錫やマラッカ錫も価格は現地での購入価格であり、実際にバタヴィアへシャムやマラッカから錫を転送するには、さらに輸送費用を要したか

表5 バタヴィアの錫集荷, 1758/59年度

(1) バンカ錫

日付	集荷方法	数量 (オランダ・ポンド)	価額 [fl.]	100オランダ・ ポンドあたりの 価格 [fl.]
1758年10月3日	会社船の移入	106,250	25,664	24.2
1758年10月26日	会社船の移入	129,500	33,200	25.6
1758年12月28日	バタヴィアでの集荷	3,125	900	28.8
1759年3月31日	バタヴィアでの集荷	510,264	146,956	28.8
1759年4月30日	バタヴィアでの集荷	93,332	26,880	28.8
1759年5月31日	バタヴィアでの集荷	245,414	70,679	28.8
1759年6月30日	バタヴィアでの集荷	416,856	120,054	28.8
1759年7月31日	バタヴィアでの集荷	128,218	36,927	28.8
1759年8月13日	会社船の移入	75,000	19,248	25.7
1759年8月31日	バタヴィアでの集荷	254,335	75,622	29.7
合 計		1,962,294	556,129	28.3

(2) シヤム錫

日付	集荷方法	数量 (オランダ・ポンド)	価額 [fl.]	100オランダ・ ポンドあたりの 価格 [fl.]
1759年4月6日	会社船の移入	30,736	11,718	38.1
合 計		30,736	11,718	38.1

(3) マラッカ錫

日付	集荷方法	数量 (オランダ・ポンド)	価額 [fl.]	100オランダ・ ポンドあたりの 価格 [fl.]
1759年4月21日	会社船の移入	189,950	63,709	33.5
合 計		189,950	63,709	33.5

註：価額ならびに価格は重フルデン表示である。

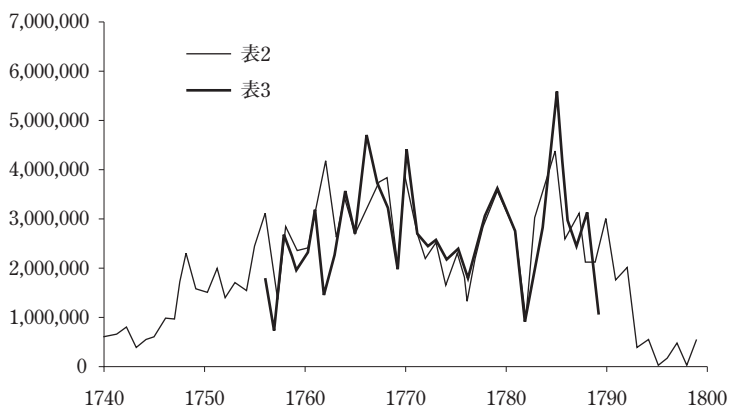
出典：NA BGB 10837.

ら、バンカ錫は、二つの購入方法のいずれによっても、極めて安価に購入できる錫であったことが確認できるだろう。

なお、オランダ東インド会社が最終的に入手したバンカ錫の年間取扱量は、表2と表3にそれぞれ示されているが、両者の数値が若干異なることには留意が必要である。どちらのデータも後年に編集された記録に基づくために誤差が生じていると考えられる。表2は、Reinout Vos が示したデータであるが、これは基本的に1790年代に作成されたと考えられる貿易全般についての記録をベースに¹⁶、各種の他の史料からデータを修正したものであると説明されている。一方、表3は、1789年にバタヴィアで作成された錫貿易に関する文書に拠っている¹⁷。もっとも、図3は両者の数値を示したグラフであるが、誤差が著しく大きいのは1762年と1766年だけであり、全般的な趨勢がほぼ等しいことは確かである。

図3 表2および表3における数値の差異

単位：オランダ・ポンド



出典：表2および表3参照。

16 NA : Collectie Nederburgh 107, “Staten van de ingezamelde hoeveelheid producten, in de verschillende V.O.C.-vestigingen in Indië, 1740-1789”.

17 NA : VOC 3821 : 793, “Saamentrekking der zedert 1756 tot 1789 van Palembang voor rekening der compagnie aangebragt thin bancas, in dato 14 Julij 1789”.

4. 新市場の登場：中国と日本

18世紀中に生じた錫販路の重要な変化は、中国に代表される東アジアでの錫需要の拡大である。旧来は、ヨーロッパや南・西アジアへ東南アジア産の錫がオランダ東インド会社によって輸送されたが、18世紀には中国、くわえて日本における需要が増大し、錫の消費市場のバランスが変化したのである。

オランダ東インド会社は、ようやく1728年に、広州における、いわゆる広東貿易に参入することにし、会社船を広州に派遣し始めた¹⁸。オランダ東インド会社は、茶などの輸出に伴う支払手段のひとつとして、東南アジア産の錫を広州で多量に売却するようになった。ちなみに、オランダは茶の輸出に対して、銀ではなく、できる限りアジア産品を支払手段としようとしていたことは興味深い。事実、東南アジア産の錫と胡椒は広東貿易に向かうオランダ東インド会社の船舶にとって、重要なバラスト貨物であっただけでなく、銀の支出を節約するための貴重な支払い手段であった。本国からの銀の持ち出しを減らすためにアジア間貿易を有効に利用しようと努めたオランダ東インド会社の一般的貿易政策をここにも看取することができる¹⁹。

表6および図4は、オランダ東インド会社の広州での販売量を示したものである。1763年以降のデータしか示されていないが、オランダ東インド会社が作成した文書に基づく最新の研究の成果に依拠している²⁰。このデータによれば、すでに1760年代には錫の輸入量はピークを迎えており、300万オランダ・ポンドをしのぐ年間販売量を記録した年も存在した。中国では、他国とも共通するように、食器や大砲の製造用に錫が利用されたばかりか、錫箔を作成するのに用いられたり、時には、鑄造原料の面で質が低下しつつあった小額貨幣である

18 Leonard Blussé, *Tribuut aan China : Vier eeuwen Nederlands-Chinese betrekkingen* (Amsterdam : Otto Cramwinckel Uitgever, 1989) p. 95 [邦訳：レオナルド・ブルッセイ（深見純生、藤田加代子、小池誠訳）『竜とみつばちー中国海域のオランダ人400年史ー』（晃洋書房、2008年）、102頁]。

19 オランダ東インド会社のアジア間貿易の評価については、たとえば、鳥田竜登「銅からみた近世アジア間貿易とイギリス産業革命」（水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』（山川出版社、2008年）所収）、146-147頁を参照のこと。

20 Liu Yong, *The Dutch East India Company's Tea Trade with China, 1757-1781* (Leiden and Boston : Brill Academic Publishers, 2007) pp. 178-203.

表6 オランダ東インド会社の広州への錫輸入量、
1763-1793年

単位：オランダ・ポンド

年次	輸入量	年次	輸入量
1763	948,213	1779	2,118,316
1764	3,481,667	1780	2,481,409
1765	3,318,154	1781	0
1766	3,184,221	1782	0
1767	2,000,824	1783	685,292
1768	2,509,362	1784	2,369,936
1769	1,566,365	1785	1,439,938
1770	2,597,466	1786	2,901,078
1771	2,405,237	1787	1,392,431
1772	2,141,089	1788	3,048,579
1773	1,585,763	1789	1,145,440
1774	1,917,277	1790	1,099,665
1775	1,540,541	1791	718,810
1776	1,368,063	1792	1,513,332
1777	1,700,019	1793	880,652
1778	2,105,520		

出典：Liu Yong, *The Dutch East India Company's Tea Trade with China, 1757-1781* (Leiden and Boston : Brill Academic Publishers, 2007) pp. 178-203.

図4 オランダ東インド会社の広州への錫輸入量、1765-1793年

単位：オランダ・ポンド



出典：表6 参考。

銅銭の鑄造にも利用された²¹。とくに錫箔のための需要は高かった。錫箔は、中国人が寺院に参詣し、死者を供養する際に燃やす紙幣の代替をなす模造紙幣の一種であり²²、18世紀に経済が成長し、人口が増大するのに応じて、錫に対する需要が増加したものと考えられるのである。

もともと、図4に明らかなように、オランダ東インド会社の広州での錫の販売量は、1760年代半ば以降、低下傾向にあった。年間販売量は、1760年代半ばには300万オランダ・ポンドを超過する販売があったが、1790年代半ばには100万オランダ・ポンド台にまで減少しているのである。こうした販売量の低下は、主として、オランダ東インド会社以外の会社や商人によって、錫が中国にもたらされたことによる。たとえば、イギリス東インド会社は、1789/90年度以降、イギリス本国で生産された錫を中国向けに輸出することを開始した²³。また、アジア人商人でも東南アジアから錫を広州に輸入する事例も近年報告されている。Li Tana と Paul A. Van Dyke によれば、シャムやパレンバン等から錫が広州にジャンク船によってもたらされたという。1758年から1774年にかけての断片的なデータであるが、たとえば、1758年には7,000ピクル（1ピクル=約60キログラム）の錫がタイ湾の北部に位置する港口（現在はハーティエンとして知られる）経由で広州にもたらされえた。港口メコンデルタやシャムから米を輸入する一大拠点であったし、中国向けの錫の集荷地点でもあった。また、1762年には、パレンバンから5,000ピクル、マカオから1,500ピクルの錫が広州に入荷している²⁴。

いずれにせよ、ジャンク船によりシャム錫やマラッカ錫、それにバンカ錫が

21 Jacobs, *Merchant in Asia*, pp. 199-201; Somers Heidhues, *Bangka Tin and Mentok Pepper*, p. 3.

22 錫箔については、武内房司「雲南の錫とインドシナ」、『歴史と地理』564号、2003年、57-58頁に詳しい。

23 William Milburn, *Oriental Commerce: Containing a Geographical Description of the Principal Places in the East Indies, China, and Japan* (London: Black, Parry, & Co., 1813) Vol.2, p. 314; H.V. Bowen, "Sinews of Trade and Empire: The Supply of Commodity Exports to the East India Company during the Late Eighteenth Century", *Economic History Review*, second series, 55(3), 2002, pp. 472-473, 475.

24 Li Tana and Paul A. Van Dyke, "Canton, Cancao, and Cochinchina: New Data and New Light on Eighteenth-Century Canton and the Nanyang", *Chinese Southern Diaspora Studies*, 1, 2007, pp. 17-18.

中国にもたらされていたことは間違いのないことである。シヤムについていえば、先述の通り、1767年のアユタヤー朝崩壊以後、オランダ東インド会社による錫輸出は途絶えているし、パレンバンからも錫が漏れなくバタヴィアに転送されていたわけではない²⁵、バンカ島ではパレンバンの支配下にありながら、パレンバンのスルタン権力の及ばぬところで、錫が島からひそかに輸出されていたことも知られている²⁶。また、マラッカについていえば、表7に見るように、1766年以降、マラッカに滞留している錫の過剰在庫をマラッカ現地で売却するようにしたのである。なお、こうした点から判断すれば、オランダ東インド会社は、日本銅の場合とは違い、東南アジア産の錫の貿易について、密貿易を排除し、錫貿易を独占的に取り扱う意図は小さかったと考えることができるであろう²⁷。

ちなみに、18世紀には日本もオランダ東インド会社から錫を継続的に購入することを開始した。表8は、オランダ東インド会社による日本への錫輸入量を示したものであるが、これによれば1740年代と1750年代に断続的に錫が日本に輸入された後、1764年からは継続的に錫が輸入された。1764年の輸入量は重量で、わずか5万オランダ・ポンドであったが、1776年には10万オランダ・ポンドの輸入となり、1780年代にピークを迎えるものの、継続的に輸入されている。山脇悌二郎によれば、こうした日本の継続的な錫の輸入は、日本の鑄銭事業と関連があったとされる²⁸。1767年に銀座が江戸郊外の亀井戸村で真鍮銭の鑄造を開始した。ここで鑄造された真鍮銭には8パーセントの割合で錫と鉛の合金である白鑞を混入させており、真鍮銭鑄造のために錫が必要とされたのである。

25 Reinout Vos, “De VOC en de Palembangse tinsmokkal in de achttiende eeuw”, *Jambatan: Tijdschrift voor de geschiedenis van Indonesië*, 6(2), 1988.

26 たとえば、Somers Heidhues, *Bangka Tin and Mentok Pepper*, pp. 20-21が挙げられよう。

27 もっとも、歴史叙述の一般的性格として、オランダ東インド会社の錫貿易独占の意図とそれに対抗する形でのバンカ島における錫の密輸出について強調する研究は数多い。たとえば、James C. Jackson, “Mining in 18th Century Bangka: The Pre-European Exploitation of a ‘Tin Island’”, *Pacific Viewpoint*, 10(2), 1970, pp. 41-42; Erwiza Erman, “Rethinking Legal and Illegal Economy: A Case Study of Tin Mining in Bangka Island”, *Tōnan Ajia: Rekishi to Bunka*, 37, 2008, pp. 92-95などが挙げられる。

28 山脇悌二郎『長崎のオランダ商館—世界のなかの鎖国日本—』（中央公論社，1980年），86頁。

表7 マラッカにおける錫の入荷と販売, 1766-1788年

単位: オランダ・ポンド

年度	移入量			販売量
	ペラ錫	他産地の錫	合計	
1766/67	?	?	471,727	0
1767/68	?	?	359,926	0
1768/69	?	?	470,657	0
1769/70	?	?	443,465	0
1770/71	?	?	760,096	0
1771/72	?	?	610,423	101,950
1772/73	?	?	?	235,625
1773/74	?	?	?	540,150
1774/75	495,696	0	495,696	399,477
1775/76	?	?	495,373	281,359
1776/77	388,801	33,804	422,605	83,588
1777/78	386,642	7,869	394,511	0
1778/79	?	?	477,892	0
1779/80	?	?	551,795	0
1780/81	?	?	539,217	0
1781/82	?	?	117,568	26,787
1782/83	?	?	?	22,527
1783/84	?	?	166,589	153,365
1784/85	?	?	351,205	308,749
1785/86	?	?	624,720	301,439
1786/87	?	?	467,279	555,357
1787/88	?	?	111,783	77,530

出典: NA VOC 3245, 3274, 3304, 3334, 3360, 3386, 3443, 3467, 3495, 3554, 3582, 3599, 3625, 3650, 3702, 3734, 3812, 3940, 3961; NA BGB 10797.

この真鍮銭鑄造事業は1788年に停止されたが、この年はオランダ東インド会社から20万オランダ・ポンドという比較的多量の錫を輸入した最後の年で、翌1789年の輸入量はわずか5万オランダ・ポンドの輸入と激減した(表8参看)。また、1780年から1787年にかけて、銀座は別途、真鍮座を兼ね、真鍮生産のために錫を必要としていたように、日本は主として真鍮鑄造のために錫を輸入する必要があったのである。たしかに、中国の輸入量と比べれば、日本の錫輸入量は極めてわずかではあったが、中国と日本という東アジア地域での錫需要が増加し、東南アジア産錫の販路が、西から東へ変化したことは注目し得る。

表8 オランダ東インド会社による日本への錫輸入量, 1740-1800年
単位: オランダ・ポンド

年次	輸入量	年次	輸入量	年次	輸入量
1740	0	1761	0	1781	160,000
1741	0	1762	0	1782	入船なし
1742	40,000	1763	0	1783	250,000
1743	0	1764	50,000	1784	50,000
1744	?	1765	84,000	1785	150,000
1745	0	1766	50,000	1786	200,000
1746	75,000	1767	50,000	1787	140,000
1747	0	1768	?	1788	200,000
1748	0	1769	?	1789	25,000
1749	0	1770	?	1790	50,000
1750	0	1771	?	1791	入船なし
1751	100,000	1772	?	1792	40,000
1752	0	1773	50,000	1793	40,000
1753	126,000	1774	80,000	1794	30,000
1754	0	1775	60,000	1795	49,485
1755	0	1776	100,000	1796	入船なし
1756	0	1777	100,000	1797	37,500
1757	0	1778	160,000	1798	30,282
1758	0	1779	100,000	1799	20,000
1759	0	1780	150,000	1800	30,000
1760	0				

出典: NA NFJ 912-966.

5. おわりに

本稿は18世紀におけるオランダ東インド会社の錫貿易について、特に数量的データに注目して概観を試みた。東南アジアにおいては、17世紀以来、シヤム南部とマレー諸国、さらには18世紀前半からはバンカ島でも錫が生産された。これら東南アジア産の錫は基本的に東南アジア域外での消費に向けられた。18世紀初期までは、ヨーロッパや南・西アジアに向けて輸出されたが、18世紀中葉以後は、中国や日本が錫の新たな販路として登場し、とりわけ中国市場はオランダ東インド会社の取扱高の大部分を吸収するようだった。言い換えれば、錫の販路が西から東へシフトしたのである。ことにバンカ島での錫生産は18世紀中に躍進し、安価な錫を市場に提供できるようになったが、これは増大する中国市場と相互依存の関係にあったことは見逃しえない。

なお、本稿は、オランダ東インド会社の錫貿易一般について概観したが、とくにその独占の問題については再言を要する。オランダ東インド会社は、長期的には、通常考えられるほど錫貿易の独占維持に躍起になっていたわけではない。とりわけ、バンカ島における錫の生産が増大した18世紀中葉以降には、独占企図の放棄の方向性を持っていたと考えるべきである。たとえば、アユッタヤー朝瓦解後にシヤムとの貿易を再開せず、シヤム錫を必要としなかったわけである。また、1766年以降には過剰となっていたマラッカ錫をマラッカ現地で販売するといったことに示されるように、需要の増大する中国市場への供給者としての独占的位置を維持することにつとめたわけでもない。そもそも、錫の生産地は極めて広範な各地に点在しており、錫そのものが銀や銅といった金属に比して安価であったこともあり、生産地からの供給を独占的に確保することは当初から困難なことであった。むしろ、オランダ東インド会社の錫貿易の特質といえば、そのアジア間貿易にあるとあってよいであろう。広州からはヨーロッパ市場向けに茶を輸出したのであるが、その支払をオランダ本国から送付される銀で決済するのではなく、錫や胡椒といったアジア産品の中国への輸入によって決済することに極力つとめたのである。たとえ、ヨーロッパとアジア間の貿易である中国茶貿易も、アジア間貿易からの利益で、できる限りまかなおうとしたのが、オランダ東インド会社の特質なのであり、それを象徴する商品貿易のひとつが東南アジア産の錫貿易であったのである。

参 考 文 献

未公刊史料

Nationaal Archief (NA)(オランダ国立公文書館) 所蔵：

Archief van de Boekhouder-Generaal te Batavia, 1700-1801 (BGB)：10676, 10797, 10837.

Archief van de Nederlandse Factorij in Japan, 1609-1860 (NFJ)：912-966.

Archief van de Verenigde Oostindische Compagnie, 1602-1795 (VOC)：3245, 3274, 3304, 3334, 3360, 3386, 3443, 3467, 3495, 3554, 3582, 3599, 3625, 3650, 3702, 3734, 3812, 3821, 3940, 3961.

Collectie Nederburgh：107.

公刊史料

John Anderson, *Political and Commercial Considerations relative to the Malayan Peninsula and the British Settlements in the Straits of Malacca* (Prince of Wales Island：William Cox,

1824).

William Milburn, *Oriental Commerce: Containing a Geographical Description of the Principal Places in the East Indies, China, and Japan* (London: Black, Parry, & Co., 1813).

研究書・論文

島田竜登「オランダ東インド会社のアジア間貿易—アジアをつないだその活動—」, 『歴史評論』644号, 2003年。

島田竜登「銅からみた近世アジア間貿易とイギリス産業革命」(水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』(山川出版社, 2008年)所収)。

島田竜登「18世紀前半におけるオランダ東インド会社のアジア間貿易」, 『西南学院大学経済学論集』第43巻第1・2合併号, 2008年。

武内房司「雲南の錫とインドシナ」, 『歴史と地理』564号, 2003年。

山脇悌二郎『長崎のオランダ商館—世界のなかの鎖国日本—』(中央公論社, 1980年)。

Barbara Watson Andaya, *Perak: The Abode of Grave: A Study of an Eighteenth Century Malay State* (Selangor: Oxford University Press, 1979).

Supaporn Ariyasajsiskul, “The So-called Tin Monopoly in Ligor: The Limits of VOC Power vis à vis a Southern Thai Trading Polity”, *Itinerario: International Journal of the History of European Expansion and Global Interaction*, 28(3), 2004.

Leonard Blussé, *Tribut aan China: Vier eeuwen Nederlands-Chinese betrekkingen* (Amsterdam: Otto Cramwinckel Uitgever, 1989) [邦訳: レオナルド・ブルッセイ (深見純生, 藤田加代子, 小池誠訳) 『竜とみつばち—中国海域のオランダ人400年史—』(見洋書房, 2008年)].

J.A.M.Y. Bos-Rops et al. (eds.) *De Archieven in het Algemeen Rijksarchief* (Alphen aan den Rijn, Samsom Uitgeverij, 1982).

H.V. Bowen, “Sinews of Trade and Empire: The Supply of Commodity Exports to the East India Company during the Late Eighteenth Century”, *Economic History Review, second series*, 55(3), 2002.

Han ten Brummelhuis, *Merchant, Courtier and Diplomat: A History of the Contacts between the Netherlands and Thailand* (Lochem: De Tijdstroom, 1987).

Erwiza Erman, “Rethinking Legal and Illegal Economy: A Case Study of Tin Mining in Bangka Island”, *Tōnan Ajia: Rekishi to Bunka*, 37, 2008.

Femme S. Gaastra, *De geschiedenis van de VOC* (Zutphen: Walburg Pers, 2002).

Graham W. Irwin, “The Dutch and the Tin Trade of Malaya in the Seventeenth Century”, in: Jerome Ch'en and Nicholas Tarling (eds.), *Studies in the Social History of China and South-East Asia: Essays in Memory of Victor Purcell* (Cambridge: Cambridge University Press, 1970).

James C. Jackson, “Mining in 18th Century Bangka: The Pre-European Exploitation of a ‘Tin Island’”, *Pacific Viewpoint*, 10(2), 1970.

Els M. Jacobs, *Merchant in Asia: The Trade of the Dutch East India Company during the Eighteenth Century* (Leiden: CNWS Publications, 2006).

C.J.A. Jörg, *Porcelain and the Dutch China Trade* (The Hague: Martinus Nijhoff, 1982).

Li Tana and Paul A. Van Dyke, “Canton, Cancao, and Cochinchina: New Data and New Light on Eighteenth-Century Canton and the Nanyang”, *Chinese Southern Diaspora Studies*, 1, 2007.

Dianne Lewis, “The Tin Trade in the Malay Peninsula during the Eighteenth Century”, *New*

- Zeeland Journal of History*, 3(1), 1969.
- Dianne Lewis, *Jan Compagnie in the Straits of Malacca, 1641-1795* (Athens, O., Center for International Studies, Ohio University, 1995).
- Anthony Reid, *Southeast Asia in the Age of Commerce, 1450-1680*, Vol.1: The Lands below the Winds (New Haven and London: Yale University Press, 1988) [邦訳: アンソニー・リード (平野秀秋, 田中優子訳) 『大航海時代の東南アジア』 I: 貿易風の下で (法政大学出版局, 1997年)].
- Bhawan Ruangsilp, *Dutch East India Company Merchants at the Court of Ayutthaya: Dutch Perceptions of the Thai Kingdom, c.1604-1765* (Leiden and Boston: Brill Academic Publishers, 2007).
- J.A. Schuurman, "Historische schets van de tinwinning op Banka", Hoofdstuk I, *Jaarboek van het Mijnwezen in Nederlandsch Oost-Indië*, 1898, Vervolg.
- G. William Skinner, *Chinese Society in Thailand: An Analytical History* (Ithaca: Cornell University Press, 1957).
- Ryuto Shimada, *The Intra-Asian Trade in Japanese Copper by the Dutch East India Company during the Eighteenth Century* (Leiden and Boston: Brill Academic Publishers, 2006).
- George Vinal Smith, *The Dutch in Seventeenth-Century Thailand* (DeKalb: Center for Southeast Asian Studies, Northern Illinois University, 1977).
- Mary F. Somers Heidhues, *Bangka Tin and Mentok Pepper: Chinese Settlement on an Indonesian Island* (Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 1992).
- Reinout Vos, "De VOC en de Palembangse tinsmokkel in de achttiende eeuw", *Jambatan: Tijdschrift voor de geschiedenis van Indonesië*, 6(2), 1988.
- Reinout Vos, *Gentle Janus, Merchant Prince: The VOC and the Tightrope of Diplomacy in the Malay World, 1740-1800* (Leiden: KITLV Press, 1993).
- Liu Yong, *The Dutch East India Company's Tea Trade with China, 1757-1781* (Leiden and Boston: Brill Academic Publishers, 2007).

付記: 本稿は主として、2009年度文部科学省科学研究費補助金(若手研究B)「近世長崎貿易の再検討—国際分業の観点から見た18世紀の日本とアジア・世界経済—」(研究代表者: 島田竜登), 2008年度JFE 21世紀財団アジア歴史研究助成「後期アユッタヤー朝のアジア間貿易—オランダ東インド会社文書からの接近—」(研究代表者: 島田竜登)ならびに2009年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究A)「グローバルヒストリー研究の新展開と近現代世界史像の再考」(研究代表者: 秋田茂・大阪大学教授)による研究成果の一部である。